特集◉はちぶせやま

鉢伏山

奥能登第二の高峰「鉢伏山」。
高洲山と連なる山塊は
大切な水源地として
「いのち」をはぐくみ
能登の風土を支えてきた。

27年前、
村が買い取ってまで守った
ブナ林が残る山。
改めて考えてみたい。
鉢伏山の「価値」と「可能性」を―。

Photo/ 町野川の源流、幻の滝と呼ばれる『白滝』

白滝自然林

「村長、ブナ林が切られてしまう」
昭和57年暮れ、旧柳田村の文化財保護審議委員・原田正彰（まさあき）さん（故人）は、村役場に駆け込んだ。

ブナ林を守った英断

「白滝の自然林」の名で親しまれるブナ林約10ヘクタール。その持ち主が、ブナの木をチップ会社に売却する契約を交わした。ブナを切ってスギを植えることは、農業と林業で生きる山の持ち主にとって自然な考え。ブナの伐採は梅雨が明けた7月末から予定されていた。

58年1月、鉢伏山は朝日新聞社と森林文化協会による「21世紀に残したい日本の自然100選」に選ばれる。全国から公募された約2000の候補地からの選定だった。

「なんとしても村が買い取る」。竹内虎治（とらじ）村長（当時・故人）の決断は早かった。「自然100選に選ばれるほどの価値ある林。村からブナ林が消えたら、子孫に申し訳ない」。

村あげての買い取り運動

村はチップ会社、土地所有者と話し合いを重ね1100万円で山ごと買い取る交渉が成立した。しかし、予算22億円、村税収入1億8000万円の村に財政的ゆとりはない。竹内村長は中西陽一県知事（当時・故人）に直談判。県は支援を表明し、石川県自治振興資金を利用できるようになった。

村当局との相談を続けていた議会は、1100万円の補正予算案を全会一致で可決。売買契約が締結され、白滝自然林は村有林として登記された。

竹内村長はのちの取材で「この村には都会にない本物の自然がある。それを鉢伏山が教えてくれた」と振り返っている。

林道から望む鉢伏山。白滝自然林は八合目付近の林道沿いにある。

鉢伏山（標高 543.6m）

輪島市の高洲山（567m）に次ぐ奥能登第二の高峰。能登半島最長の河川町野川の水源地。山の名前はすり鉢を伏せた形からと言われている。本州では 1000m 以上の高所に分布するブナ林約 15ha が残る。

1969 年　旧柳田村天然記念物
1983 年　21 世紀に残したい日本の自然 100 選
1985 年　朝日森林文化賞奨励賞
1986 年　森林浴の森 100 選
1995 年　いしかわの森林 50 選

ムカシトンボ

『生きた化石』と呼ばれるムカシトンボ。町内では鉢伏山を水源とする町野川や山田川上流域など限られた場所にだけ生息し、町の天然記念物に指定されている。県内でも数少ない水生生物の研究者、谷口正成（まさしげ）さんを訪ね、ムカシトンボと鉢伏山の自然について伺った。

ムカシトンボの幼虫（平成22年6月17日に田代地内で採集。体長約25ミリ）

30年以上、能登の水生生物を調査・研究してきた

谷口正成さん

たにぐち・まさしげ（82）＝当目＝

【PROFILE】
公立学校の教員を務める傍ら、昭和47年から1年間、金沢大学理学部生態学教室で学ぶ。大学では主に河川の底生動物（川床に生息する動物）に関する調査、研究を行う。以後、町野川をはじめ能登の河川を中心に30年以上水生生物の調査を続ける。平成8年知事表彰（自然保護）、16年環境大臣表彰（環境保全功労者）。これまでの活動を記録した著書「この川にこんな『いのち』が～能登の河川の水生生物～」を20年に出版。町文化財保護審議会会長職務代理。

ムカシトンボは中世代ジュラ紀（約1億5000年前）の姿をそのまま残す「生きた化石」として有名。インドのヒマラヤ産「ヒマラヤムカシトンボ」と世界で二種のうちの一つ。日本では一種一属。幼虫は体長20ミリ前後で、幼虫期は7から8年。清流の環境指標生物。成虫の時期は4月から6月で体長は50ミリ前後。

鉢伏山水系が流れる田代地内でムカシトンボを採集する谷口さん。久しぶりの採集ということだったが、その勘は鈍っていない。調査開始後30分程度でムカシトンボを発見。「こんなに早く見つかるなんて今日は運がいい」と笑顔。山深い谷ではなく、車を降りてわずか20メートルの地点。身近に貴重な自然がある証拠だ。

ムカシトンボのいる自然

「能登で初めてムカシトンボに出会った時の感動は忘れられません」と話す谷口正成（まさしげ）さん（82）＝当目＝は、昭和47年から30年以上、能登の水生生物を調査・研究してきた。

谷口さんが調査を続けてきた河川は①町野川②山田川③河原田川④大谷川⑤鵜飼川―の5つ。それぞれ数多くの調査地点を設定し、2月、5月、8月、11月と年4回の調査を3年間実施した。

「町野川上流（鉢伏山）は2月の積雪が150センチ前後。カンジキをはいて、スコップで除雪しながら調査地点に入っていました」と当時の苦労を振り返る。

この時の調査は50センチ四方にどれだけの生物がいるかを調べる定量調査。その調査とは別にムカシトンボの分布も長年調査した。当時県内に広く分布することが知られていたムカシトンボだが、実際に能登の河川で確認された例は少なかった。

「47年から27年間の調査で18地点に分布が確認できました。特に町野川上流域に数が多い。それだけ自然が壊されずに残っているということです」

ムカシトンボの生息環境は、上流域で広葉樹林があり、日の光が届かない山間部に限られる。成虫になるまでに8年という長い幼虫生活を送るトンボの代表格。個体が確認されれば、その場所の自然が変化していないという指標にもなる。

平成13年、谷口さんの調査を受けて、ムカシトンボは旧柳田村の天然記念物に指定された。

河川と水生生物は、地域の自然を写す鏡です。

子どもたちが学ぶ「いのち」

平成8年から、谷口さんは県内各地で河川学習に参加。子どもや保護者たちと一緒に水生生物を調査した。

「川底にいる、わずか数ミリの水生生物。その一つ一つに『いのち』があることに子どもたちは驚き、夢中になって調べます。そんな子どもたちは、『いのち』の大切さを理解してくれます。もっとたくさんの子どもたちに自然を体で感じる体験をしてほしい」と訴える。

川は海につながっている

「水生生物は非常に弱い生き物。その種類は、環境の変化のために年々減少しています。河川と水生生物は地域の自然を写す鏡なのです」

古里の小さな『いのち』を見続けてきた谷口さんだからこそ、伝えることができる言葉。

「川は森で生まれ海に流れます。すべてがつながっている自然の中で、わたしたち人間が生きているのです。雨が降らなくても川が枯れないのはなぜでしょうか。その理由を考えてみてください。ムカシトンボがいる、この貴重な自然を守るためには、自然への関心をみんなが持つことが大切です」

竹取物語

鉢伏山をエコツアーの舞台とする新たな取り組み。その中のプログラムの一つがネマガリタケを刈り取る森の保全活動「竹取物語」だ。この活動の目的や効果を知るため、同行取材した。

ネマガリタケを刈る意味

5月30日、鉢伏山頂上付近で5回目となる竹取物語が行われた。参加人数は子ども3人を含む16人。地元柳田地区のほかに、小木や宇出津、鮭尾からの参加もあった。

車で林道をのぼり、山頂手前からは枝切りバサミを手に徒歩。三角点（頂上）の手前は2㍍以上のネマガリタケで覆われていた。なぜネマガリタケを刈り取るのか。ありのままの自然を残した方が良いのではないか―。竹取物語を主催するエコツアーガイドの山﨑昭宏さん（42）＝笹川＝はこう答える。

「ササ（ネマガリタケ）は明るい光が必要な植物で、本来は森の外側を縁取ります。しかし薪（まき）や炭のために木を切り森は明るくなった。そしてササが森の中に入ってきた。石油エネルギーの時代が来て、薪炭の需要がなくなると山は放置されました。森の植物はササに対する抵抗手段を持っていません。ササが密生し生い茂った森は、本来育つべき草や低木が駆逐され、新しい木の芽も育つことはないのです。

ササを刈ることは、森を本来の姿に戻すこと。人の手が入ったことで植生が変わった森を、人の手で取り戻す活動が竹取物語なのです」

作業が始まって2時間。目標としていたエリアの刈り取りが終わった。ネマガリタケが無くなった森は、違う場所と思うほど開放的な姿になった。

ネマガリタケが生い茂る鉢伏山山頂付近。第5回竹取物語は町民16人が参加。約2時間、楽しみながら森林保全の汗を流した。

【写真左上】ネマガリタケ（チシマザサ）の根元。1.5㍍から3㍍の大型のササで、根元から曲がっているので「根曲竹」と呼ばれる。**【写真右上】**枝切りバサミで根元からネマガリタケを刈り取る。作業は手作業。自分たちの手で次世代の森をつくる。**【写真下】**作業後の森。光が入り、人が歩けるようになった。百年後の森をつくるため、新しいブナの芽を植えた。

次世代の森の始まり

その一区画に山﨑さんはブナの苗を植えた。

「鉢伏山本来の姿はブナ林だったはずですが、頂上付近にブナはほとんど残っていません。ブナを植えることは、百年後の森の始まりに立ち会っていることになるのです」

昨年4月、能登町に移住しグルーヴィ能登事務所（当目）に着任してから毎日のように鉢伏山に登っていた山﨑さん。その思いに賛同し竹取物語に参加する地域内外の人々。

刈り取った森を歩きながら、鉢伏山の森が少しずつ生まれ変わっていることを感じる。

「竹取物語は、毎回参加者もテーマも違います。いろいろな人の知恵が集まり新しいことが生まれるかもしれません。自分たちで物語をつくる。それも竹取物語です」

1週間後の6月6日に開催されたイベント『歩こう歩こう鉢伏山』。参加した子どもたちは、この日刈り取った森の中で楽しそうに遊んでいた。

第3回竹取物語（昨年11月18日）の参加者。山頂付近の活動は所有者の坂下政行さん（後列左）の許可を得て実施されている。

㈱グルーヴィ・インタープリター

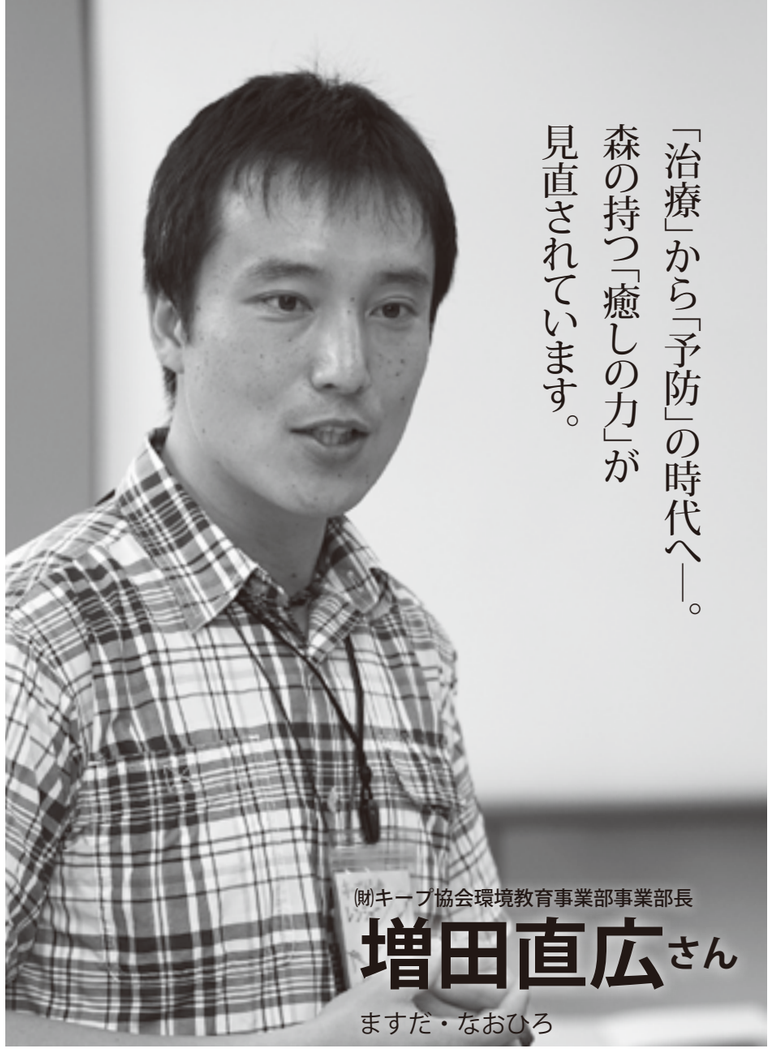
山﨑昭宏さん

やまざき・あきひろ

森のチカラ

エコツアーや森林療法など、全国各地で自然の力を生かした取り組みが広がっている。今回、八ヶ岳の麓（ふもと）、清里高原（山梨県）で「環境教育」を掲げて活動するキープ協会の取り組みを取材した。

「治療」から「予防」の時代へ―。森の持つ「癒しの力」が見直されています。



㈶キープ協会環境教育事業部事業部長

増田直広さん

ますだ・なおひろ

（財）キープ協会

KEEP は、Kiyosato Educational Experiment Project（清里教育実験計画）の頭文字。山梨県八ヶ岳の麓、清里高原に実践的なモデル農村コミュニティーをつくることを目指して、故ポール・ラッシュ博士によって 1948 年に創立される。83 年からは環境教育に取り組んでいる。

―キープ協会とは。

キープ協会は環境教育を実践しています。環境教育とは持続可能な社会をつくること。人にとっても、自然にとっても平和な社会。つまり「自然と人」「人と人」が調和している社会を目指す取り組みです。

わたしたちの活動を違う角度から見れば「エコツアー」であり「森林療法」であると言われます。ほかの地域のお手伝いをすることも多く、いしかわ自然学校にも携わっていました。

―森の力をどう生かすか。

森に入ると心が落ち着くという経験は皆さんにもあると思います。森には心をリラックスさせる「癒しの力」があります。

木の感覚（触覚）、せせらぎの音など自然のリズム（聴覚）、鳥の動きや風景の変化（視覚）、森の香り（嗅覚）など、森には五感で感じるものがたくさんあります。それらを総合的に活用して、心と体の健康増進を図ることが森林セラピー。わたしたちは「森療（しんりょう）時間」というプログラムを提供しています。

病気を治す「治療」ではなく、病気にならない「予防」が見直されています。心と体をリフレッシュさせる「森の癒しの力」は、今後ますます注目されるでしょう。もちろん人間だけではなく、森も一緒に元気になるという視点も忘れてはいけません。

―能登の可能性は。

能登の魅力は海も山もあるということです。そこに文化や食などの要素を取り入れれば、さまざまなエコツアーを実践できると思います。必要なものは企画を形にする『思い』と『人材』。時間はかかりますが、地域の人たちと交流し、地域の魅力を再発見するしかけづくりを地道にやっていくことも重要です。

6 月 19 日、キープ協会の二人を講師に招いた「森林療法研修」が能登町雇用創出連絡協議会によって柳田植物公園で開催された。本杉美記野さん（右）は、五感で自然を感じるプログラムを紹介した。

「鉢伏山は観光の山ではない。
自然の尊さを勉強する山です」
鉢伏山の保護を訴えた
原田正彰さんの言葉。
かつて先人たちの手で
守られた鉢伏山に
新しい命が芽吹き始めている。
この森を
次の世代に引き継ごう。
今を生きる
わたしたちの手で―。

5、6 年に一度のサイクルで一斉に芽吹くブナ
（白滝自然林で）

鉢伏山の頂上に義経が黄金を埋めた―。そんな伝説があるんです。

人の輪に

―Vol.46―

鉢伏山頂上の所有者

坂下政行さん

さかした・まさゆき（90）＝北河内＝

鉢伏山の頂上「三角点」

「鉢伏山の頂上にある三角点は、永久に国に貸す契約をしています。明治の初めごろ、先々代のころでしょうか。今でも5年に一度、国土地理院の人が調査に入るときにあいさつに来るんですよ」

鉢伏山頂上の土地所有者、坂下政行さん（90）＝北河内＝は鉢伏山にまつわる言い伝えを幼少のころから聞いてきた。

「山岳信仰が盛んなころ、たくさんの修行僧が鉢伏山に入っていました。『山頂に七堂伽藍（しちどうがらん）あり』と言われ、山頂付近には大きな寺があったと伝えられています」

修験道の霊地としてあがめられ、守られてきた鉢伏山。そこにはいくつかの伝説が語り継がれている。

山頂に残る黄金伝説

鉢伏山に残る伝説。その一つが埋蔵金伝説だ。

『『毎年元旦には山頂で黄金の鳥の鳴き声を聞く』『海の上から山頂を見れば黄金の火柱があがっている』と言い伝えられています。山頂に埋められた黄金は、源義経のものとも、上杉謙信のものとも言われています。

奥州へ逃れる義経一行は輪島から能登に入り、珠洲の須須神社に笛を奉納したと伝えられていますが、その途中、鉢伏山の頂上に80貫（300キロ）の黄金を埋め、赤崎（輪島市）の亀井家にその見張りを任せたということです。武蔵坊は当目に足跡を残していて、旧当目小学校にある二宮金次郎像の台座は弁慶が踏ん張って割った石と言われています。

この伝説を信じた人が、明治時代に一年かけて掘り返したことがあるそうです。この時は刀が出てきたと言われています。

さらに昭和8年2月、深さ4間（約7メートル）の大きな穴が掘られました。黄金の阿弥陀如来を発見し、輪島への道中に80円のおさい銭を集めたそうです。しかし金メッキの偽物と判明し、警察ざたに。父親も輪島の警察に呼ばれました。

わたしは当時16歳で父親と一緒に穴を見に行きましたが『ひどいことをするな』と思っていました。その穴は今でも残っていて、掘った土砂は南側に積まれています。

このほかにも、能登を攻めた上杉謙信が立ち去る際に軍資金の一部を埋めたという伝説もあります」

水源としての鉢伏山

「鉢伏山は保安林を除いてほとんど植林されました。わたしも植林をしました。その結果、川の水は半分になってしまいました。スギは水を吸いますが雑木林は水を蓄えます。鉢伏山の頂上からも『御仏供様水（おぶくさま）』と呼ばれるわき水が枯れることなく出ています。この水が町野川の源流です。

今、山頂でネマガリタケを刈り取りブナを植えたいという人たちがいます。わたしも所有者として何度か参加しました。

鉢伏山の頂上がブナ林になり、人が楽しめるようになれば、すばらしいことだと思います。先祖代々守られてきた鉢伏山の頂上を、これからも守っていくことが坂下家の使命です」

【写真左】鉢伏山頂上（543.6メートル）地点にある三角点には標識となる柱石が埋められている。緯度・経度・標高の基準点。
【写真右】林道沿いにわき出る「御仏供様水」。この水が流れ落ちる先が「白滝」と呼ばれるエリア。